

陸教授の退任を惜しむ

学 長 加 藤 寛

陸正教授は、2000年4月、政策情報学部の開設とともに千葉商大に着任された。その時、若干のいざこざがあった。

実は当時私は、教育の基本は会計・簿記にあると考えていた。これは福澤諭吉の次の言葉に発する。「日本の教育がなにゆえにかくも齟齬したるやと尋ねるに、・・・その教育を人間世界に用うるの工夫を忘れたるの罪なりと答えざるを得ず」そこで諭吉は1873年H・B・ブライアント、H・D・ストラットン共著『帳合之法』を翻訳して出版した。「商家の必要欠くべからざるものなりといふ。・・・大福帳さえ一見したることはなけれども、今この原書を翻訳すれば大福帳の法に勝ること万々なり」「経書史類に奥義は達したれども商売の法を心得て正しく取引をなすことを能わざる者は、これを帳合の学問に拙き人というべし」

かくて日本の商人は、官をおそれ官におもねり官に頼っていたから、商業は次第に官に支配されていった。千葉商大創設者遠藤隆吉は、千葉商大の前身巢鴨高商設立趣意書にこう記した。「今日商業道德の荒廃は頗る寒心すべきものあり。外国貿易の不振も畢竟ここより来る。ゆえに実業家となるべきものに商業的道德を吹き込み、とくに武士的精神を注入するは最も急務なりといわざるべからず」

かくて私は自然言語（外国語）人工言語（コンピュータ）そして会計言語（会計・簿記）を唱道していた。ところが政策情報学部を創設したとき、この三言語のうち、会計言語が古くさいとされ拒否された。いまでは三言語が一般的になっているが、これを会計言語といわずデータ言語ということにされた。私はいささか受けいれがたかったが、陸教授の就任によってこの気持ちがおさまった。

陸教授の統計学ならわかる。統計（データ）言語では無味乾燥なあの統計学かと思ったのだが、陸教授の統計学は違う。多くのデータにもとづいてそれを実学の世界になぞらえていく。「花王の陸」という名声は決して不毛ではない。このデータ言語なら理解できる。街の中の実学をぜひこれからも続けてください。